

秋に想う

川崎千束

この明るさのなかへ

ひとつの素朴な琴をおけば

秋の美しさに耐えかねて

琴はしずかに鳴りいだすだろう

秋になると

果物はなにもかにも忘れてしまつて

うっとり実のつてゆくらしい

右の二篇は八木重吉の詩である。

倉橋先生は「秋をあるく」と題して、

秋がさそい出す。子どもをつれてか、子どもにつれられてか。どっちでもいい。というよりも、どっちでもある。さきになり、あとになり、そうして手をつなぐ。さきになり、あとになるというのは、あるき方ばかりではない。(中略)ただ、その秋が、おとなと子どもではちがうことがある。季節をとらえるものは詩であるが、子どもの秋の詩と、おとなの秋の詩と

に、しばしば大きな違いがある。それを、つい取りちがえたら、子どもといっしょに秋をあるいていることにならぬ。

お月見

幼稚園の秋季の計画を立案する会合に付き合つたとき、九月には“お月見を”という案に私は反対意見を述べた。が、無勢で、お月見案に乗切られてしまった。お月見を温存したい方々の意見は、

今頃の母親たちは、心の余裕を持たないから、お月見を行う家庭は稀になってしまった。古来の美しい行事がすたれてゆく傾向だからせめて幼稚園で代行して楽しいお月見を味わわせたい、というのである。

私はお月見そのものに反対するのではない。せめてお月見ぐらいは、家庭で母と子によって行われたいと希うのであって、子どもたちはお団子まるめは大好きであるし、上新粉は手にはいり易く廉価でもある。夕餈を早く片付けて、ゆったりと母と子でお団子まるめをしたら、

どんなに楽しいだろう。それすら臆怯なら胡瓜でも茄子でもよいお供えの形をとって、とにかく親子で仲秋の名月を仰いで、清爽感と団欒感を味わえたら……と考えるからである。

月見の宴というのは、中国から伝来したものであろうと推測される。月夜の美を讃えたものは唐詩に多い。その唐の文化が我国の奈良時代に横来して、最初は、“去年の今夜清涼に待す”のように、貴族文化として根付き、江戸時代に至り、庶民のものになったのではないかと文献からも思考される。結局、大人社会の風流心として伝承されたものであろう。

私は九月の計画案に入れるのなら“縁日”をとりあげたい。夏祭り秋祭り子ども達の心は弾む。縁日のにぎわいは庶民の子どもの心を捉えてはなさないであろう。

『えんにち』（福音館発行）の本がポロポロになるまで、二人の子が好きで好きで。それで一人をおんぶし、一人の手をひいて亀戸の天神様の縁日に行つたら、あの本の通りで子どもたちが帰ろうとしないのです」と、児童学部を出た若い母親の満足げな述懐である。私も曾て若い仲間と手作りの品をバザーで売り、その純益金で綿

あめ機と、たこ焼の道具を購入し、この二つと金魚すくいには本ものを用い、お面だのの玩具類は子どもたちの手作り、年長児の自主による縁日あそびを展開したとき、子どもたちは降園しようとしなくて、子どもも大人も満足した体験がある。

月見は個々の家庭でできる行事であるが、縁日は友だちの人数と協力と知恵とが必要で家庭では代行できないものであろう。

朴の花

朴の花の咲く新緑の候に、東北のM市の幼稚園を訪れる機会があった。好天の日で子どもたちの声が門外にまで溢れ、園庭に出された机上で、三歳児が立ち姿で全身の力をこめて土粘土をこねている。叩いたりぶっつけたり、柔かくなりはじめたらまるめたり棒にのばしたり一時間近くの集中ぶりである。

遊んでいる時は縦割り保育の形態をとり、輪をつない

だ汽車が年少のお客を乗せて、丘を昇降往復している。

固定遊具を少くしこの丘を造築したとのこと。翌日は肌寒い小雨で、数人が折り紙の本を見ながら自学自習をしている。八分板の特製の十脚ほどの仕事机のある部屋では、金槌や鋸の音が高々とひびいている。三歳児は焼手ごろごろと部屋中を先生と一緒にころがっていて、降園のとき先生はひとりひとりを抱いて母親に手渡していられた。

あの大きな朴の葉が時雨にぬれてパサッと音たてて散るときに、あの園の子どもたちはどんな創意のあそびを産み出しているであろうか。朴の花のような甘い香りの心に残る保育ぶりである。

